

ユダの福音

最近『ユダの福音書』が新聞紙上を賑わせています。4月21日のある全国紙には、「ユダは裏切り者ではなかった？4月6日、解読結果が発表された1700年前の『ユダの福音書』。ユダがイエスをローマ官憲に引き渡したのは(本当はローマ官憲ではなく、ユダヤ人当局に、ですが)実はイエス本人からの指示だったという衝撃的な記述は・・・大きな話題となっている」という記事がありました。「この福音書の内容を伝えられたある司教は、ふらふらと卒倒しかけた」そうです。しかし、キリスト教の起源についての歴史を少しでも知っていれば、この発見？によって動揺することは考えられません。その司教様はきっと朝食を取っておられず貧血に襲われたのだと思います。

この問題の論点は次の二つにまとめられます。、『ユダの福音書』を、教会の伝統的教え(四福音書と聖伝)よりも正しいと考えること。、教会が真実を隠しているということ。それぞれを検討してみましょう。

『ユダの福音書』は、もちろん12使徒のユダが書いたものではありません。ユダは裏切りの後すぐに自殺しましたから、そんな時間はありませんでした。これは世に言う多くの「偽福音書(福音書の体裁をとっているが、聖霊の靈感を受けていると認められなかった書物)の一つで、著者は不明ですが、2世紀に書かれたものです。もし、この書物が真実を伝えているならば、「マテオ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書」が真実の歴史を語っていないということになります。例の記事は「4世紀に成立した新約聖書に採用された福音書は、・・・四つだが、それ以前にはユダを始め、数十種類の福音書が存在していたが、「それらが正統と異端に選別された結果、後者は歴史の間に葬られた」と説明します。記事は四福音書の成立年代を「イエスの刑死から40～70年たってから」としていますが、この成立年代は定説ではありませんし、51年から67年にかけて書かれたパウロの手紙に出てくる信仰の内容と、福音書のそれとが合致する(特にどちらもイエスの復活、神性を主張している)ことから、福音書ができた頃にはすでに私たちが今でも公言する信仰があったことは疑いがありません。つまり、信者たちは最初から四福音書や口伝の教えを、使徒たちから伝えられた教えとして信じていたので、その教えとは異なる教えを主張する「偽福音書」は誰も相手にしなかった、ということです。

聖書が聖書でないかの「選別」は最初の時期からありました。でないとミサの時に何を讀むかで混乱しますから。2世紀中頃のものとされるムラトリ断章には新約聖書のリストがはっきり載っています。ただ、そのリストが教会当局によってはっきりと宣言されたのは、確かに4世紀の末(カルタゴの地方教会会議)です。でもそれは4世紀に初めて四福音書が聖書として「採用されえた」と言うのではなく、それまで聖書として認められてきた事実が確認されたという意味です。

、カトリック教会は真実を隠しているのでしょうか。以前も復活の信仰に関して書きましたが、キリスト教という新しい宗教を始めたのは、実在したイエスを近くから目撃した人々でしたが、彼らがキリスト教を伝えたとき、自分たちの命をかけて宣教しました。事実彼らのほとんどが、「その信仰を伝えないなら、助けてやる」と言われたが、「我々は見たこと聞いたことを黙っているわけにはいきません」と言って、死を選んだのです。真実を隠して嘘を言うのは、何か得する(大金をせしめるとか、名誉を得るとか)ときだけでしょう。自分が侮辱され、牢屋に入れられ、鞭打たれ、殺されることを承知で嘘を言いつづける人がいるのでしょうか。カトリック教会の教えの第一の保証は、「み言葉の奉仕者となった人たちが殉教したことです。

むしろ、教会が聖書と認めた四福音書には「教会にとって都合の悪い事実」が少なからず記録されています。教会がただただ布教の効果を考えて、経典を取捨選択したり、改ざんを加えたり

しらのなら、「都合の悪い事実」をなぜ削除しなかったのでしょうか。それは、教会がただただ使徒たちが伝えた主イエスの教えを忠実に後世に伝えようとしたから、という答え以外には答えが見つかりません。

また、もし教会が真実を隠していたなら、2000年にもわたって数え切れない人々が騙されたこととなります。もしそうなら、現代日本でも色んな詐欺事件がありますが、これ以上巧妙な詐欺事件はないと言えるでしょう。また、この間だまされ信じ続けてきた膨大なキリスト信者は「全く批判精神に欠けていた」と言うに等しいことです。初代教会には、教父と呼ばれる人々が綺羅星のごとく出ました。その中には、聖アンプロシウスや聖アウグスチヌスのように古代の思想界において頂点を極めた人も多し、当時の権力者から頼られた人（ダマスコの聖ヨハネはイスラム教のカリフの宮廷で働いた）も少なくありません。このような人々が現代の二流の学者や報道関係者より批判精神がなかったとは、少々考えにくいことです。

今回と同じようなニュースが10年ほど前にありました。それは死海文書の中にキリスト教の始まりに関する史料があり、教会はそれをひた隠しにしているというものでした。しかしその主張はその後どこかに消え去っています。このような主張は全世界に10億人以上いるカトリック信者の信仰を揺さぶるものですから、しっかりした証拠を出して発表してもらいたいものです。『ユダの福音書』をめぐる騒ぎは、最近どこかの国を騒がせたメール事件とよく似ている感じがします。

『ユダの福音書』を始め多くの『偽福音書』が消え去ったのは、教会がそれらを隠したからだというのはお門違いです。別に教会はそれらの存在を隠していたことはなく、それらはいつも知られていました。ただ、それらの偽書や外典が忘れ去られたのは、それらが語っている物語が「あまりに荒唐無稽」であるから、人々の注意を引かなかったからだというべきです。

実際、『ユダの福音』には、肉体は悪であるから肉体から靈魂を解放することを善であるというギリシアの思想（ピタゴラスやプラトン）が見られますが、これはイエスの時代のパレスチナには存在しなかった思想です。つまり、後の時代の人々が、自分たちの考えに合うように、物語をでっちあげたというのが真相でしょう。

世の中には「古典」というものがあります。古典の一条件はそれができた時代を超越していつでも人々を魅了するということでしょう。現在本屋の本棚には積んである無数の本のうち、どんな本が100年後も印刷され（そのころ印刷した本がどれほど残っているかは別にして）販売されつづけるのでしょうか。今目にしている本の99%は消えてしまうでしょう。それが『偽福音書』に起ったことです。

（注、以前も言いましたが、『偽福音書』のいくつかは日本語にも訳されています。教文館の『聖書外典偽典』には「エピオン人福音書」、「ヘブル人福音書」、「エジプト人福音書」、「ヤコブ原福音書」、「トマスによるイエスの幼児物語」、「ペテロ福音書」、「ニコデモ福音書」が掲載されています。是非お読みください。本当の福音書との違いは一目瞭然です。また「都合の悪い教義」については、メッソーリ、『イエスの仮説』、ドンボスコ社の第8章を参照してください）。